



夏見台幼稚園・保育園 ニュースレター 2022.3.25 号

夏見台幼稚園・保育園でのこ
わりをニュースレターにまとめます。どうぞご覧ください。
※配信停止の方はメールでどうぞ (info@treponte.jp まで)

〒273-0866 船橋市夏見台 2-16-1 夏見台幼保園

解説: 幼児教育その3「絵画表現」

1. 0～2歳クラスの場合

絵画表現は0歳からは特に行いません。2歳の誕生日を迎える頃から「クレヨン」のなぐり書きや「小麦粉粘土」(口に入れても平気なように小麦粉で作った手作り粘土。食紅で色をつける)で、「色あそび」をしていきます。

小麦粉粘土はすぐに傷みますのでその都度用意します。

小麦粉粘土の目的

- ① 感触を楽しむ
- ② 手先の運動(器用さ)

粘土では何かを作るというよりも、感触を楽しむということが中心です。そうした意味では「認識あそび」の要素と混じります。五感を使ってさまざまな感触を楽しむこと。後々で「砂が気持ち悪い」というようなことが起こらないように。不快な記憶ではなく「快」の記憶として残るように。また指の動きを訓練することも重要な要素です。



手先の器用さは重要です。「小麦粉粘土」「フィンガーペインティング」。夏になれば「ボディペインティング」もやります。身体に着色します。ボディペインティングでは、小麦粉を溶いたものに色をつけます。また、だいたい2歳半くらいから絵筆をつかむことができます。「ドロコあそび」もやります。



南部愛子
名誉園長

2. 3歳クラスの場合(幼稚園はここから)

3歳になると色の3原色(赤黄青)を意識した内容になってきます。最終的には5歳になると自分で色が表現できるようになります。

3歳の場合は、例えば、1つの入れ物に赤の筆なら赤の筆をあらかじめ用意しておき、それを使います。違う色と混ぜ合わせません。

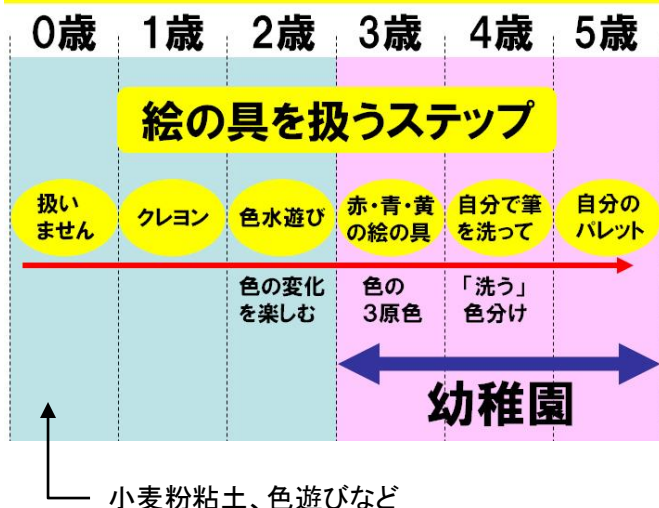
というのも、最初は絵筆を「洗う」ことができないからです。そのままに任せておくと全ての色がグチャグチャに混ざってしまいます。だから3歳では「赤を使うには赤専用の絵筆」「青色を使うには青専用の絵筆」と決めておきます。

3. 4歳の場合

これが4歳になると「自分の絵筆(My絵筆)」を持って、それを自分で洗って、次の色と混ぜることができるようになります。発達段階に合わせて、少しずつ主体性を与えていきます。

しかしこの時点ではまだパレットは使わず、紙の上で、色が混ざって違う色ができることを楽しみます。段々と扱う色数を増やしていきます。

絵画表現(発達段階に合わせたカリキュラム)



4. 5歳の場合

5歳では「自分のパレット (Myパレット)」。

自分の判断で色を選択できる。ここが最終目標になります。

しかし以上は大まかに3、4、5歳を分けているだけであって子どもの発達段階に合わせて適宜対応を変えます。場合によっては3歳の後半でもさまざまな色を扱うことができる子どもがいるかもしれません。

5. 「異年齢クラス」について

私たちの園では、異年齢クラスになっています。3～5歳でひとまとまりです。年齢別にクラスを分けている園では「3歳ならばここまで」「5歳ならばここまで」というように、厳格に保育・教育内容が分けられることもあります。

しかし私たちの場合、3、4、5歳が一緒に教室にいるので、3歳児が、お兄ちゃんお姉ちゃんのやっているのを見ています。将来の方向性が見えます。自分はまだ5歳児のようにできないけれど、つねにそばで見ているので刺激され意欲的になります。

6. 「異年齢クラス」への不安について

しかしお母さんの中には、異年齢クラスを嫌

がる方もいます。

例えば、5歳の子どもを持つお母さんから「小さい子と一緒にだと足を引っ張られる」という声を聞くことがあります。しかし心配はありません。かえって、上の年齢の子どもはしっかりしてきます。「教えてほしい」といわれると、自分が理解していなければなりません。

きちんと教えてあげたいと思うので、自分の行為にも熱が入ります。リーダーシップの目覚めです。「見られている」という刺激は、より大人に近づこうという意欲を高めます。もの凄く成長します。

5歳児が自分の「Myパレット」を使って絵を描いているのを見た3歳児が、興味を持ってせがまれて、教えてあげるといようなこともあるわけです。

また見ることも大事です。実際にはできなくても上の子ががやっている様子を見て

「あ～あんなふうにやってみたいな～」

とあこがれる。しかし実際はうまくいかず、

「あ～やっぱりできないな」

とわかる。でも「いつかお兄ちゃんみたいにやるぞ!」と思うわけです。憧れる存在があり、憧れる存在になれること。その意欲が大事です。そうして、お兄ちゃんお姉ちゃんも真剣になるしやさしくなるのです。

「真の育ち」とは何か？それは「教えること」によってではなく、「憧れに向かって」おのずと育っていきます。これを本当の意味での**主体性**というのです。(終)